

平成二十八年（丙申）三月二十八日

先月、初めて訪印す。仕事上の出張なれば観光を愉しむ暇（いとま）なきは覺悟の上なりけるも、四泊六日の新德里滞在を通じて大小幾多の文化的衝撃あり。此處にては初日と最終日に就きて一部のみ記す。

二月某日（初日）

十時間を越す飛行は約三年ぶりなり。德里空港に現地時間午前一時に到着す。夜中にも世界中より訪るる數多の人々混雑す。數十分かけて漸く入國審査を終へてロビーに出づるも、迎への人見當らず。到着時刻等既に通知済なるに、是が噂に聞きし印度人特有の時間感覺なるべしと諦む。同道の印度に詳しき同僚、攜帶電話にて受入先の擔當者に聯絡す。出口周邊は騒然として會話は容易に聞き取れず。幸にして聯絡つき、迎への人數十分後に笑顔にて姿現はす。小生、機先を制すべく、ノープロブレム、と第一聲を發す。先方、アイホープ アイム ノット トウレイト、と返す。先づは意思疎通を確認し安堵す。然れども、最初の衝撃は此の直後に來る。空港の外に一步出づるや凄まじき霧の世界廣がり、俄に喉痛み出す。同僚曰く、是ぞ惡名高き德里の微細埃（PM2.5）なる、と。本邦にては北京の深刻なる狀況が取沙汰せらるるも、新德里に就きては聞くこと寡なし。印度研究を専門とする同僚なれば新德里の大氣の狀態に至る迄熟知すれども、小生の如き素人にして初の訪問者には知る由もなし。今回の旅の不吉の豫兆やと憂ふ。

二月某日（最終日）

（前略）全日程を無事終了し空港へ向ふ。途上現地案内人を介し印度の手工藝品を賣る老舗土産店に寄る。佛教發祥の地たる此の國滞在中佛教文化、平田篤胤の『印度藏志略』にて讀みし「婆羅門之國」等を實感する機會を得ざれども、此の店には佛像を始め印度の傳統性及宗教性を象徴するもの數多あり。残念乍らゆるらかに觀賞するの暇なく、「定番」なる土産用の紅茶數函のみ取りて勘定臺前の長蛇の列に加はる。客の大半は中國系の團體客と思ゆ。隣りの列に並ぶ中國人の一人は大量の商品を抱へ米百弗札にて支拂はんとす。印度人店員、クレジットカード又は盧比のみ使用可なり、と頑として受附けず。其の中國人は英語を解せざる様子にて、頻りに米百弗札を差し出ださんとす。日本にては「爆買ひ」の中國人觀光客大歓迎とて米弗可とする場合もあり得べし。印度人店員誰一人として柔軟なる對應見せず、竟に其の中國人の客を店外に誘導す。嘗て知人の富裕印僑に感じたる商人的感性は此處にはあらざるなり。同僚曰く、中國人の「爆買ひ」パワーにも屈せぬ印度人の頑強性と云ふべし、と。

今次訪問前の印度に對する小生のイメージは大方崩れ、稍混亂せり。「婆羅門之國」も佛教も土産店にて初めて感ずる始末なり。又、是迄日本、米國、濠洲、英國にて印度の軍人、外交官、數學者、研究者、美味なるカレー等に接して得たる印象も表層的かつ斷片的に過ぎざるを痛感せり。未だ神祕にして深遠なる哉印度、我が好奇心を大いに刺戟す。（了）

（平成二十八年四月十七日受附）